

特集：カンキツグリーンング病

ベトナムメコンデルタ地域における カンキツグリーンング病とその管理法

国際農林水産業研究センター ^{いちのせ}市瀬 ^{かつや} 克也・^{かのう}加納 ^{たけし} 健

はじめに

カンキツグリーンング病がアジアで拡がりはじめたのは、1950年代からである (FFTC, 2001)。ベトナムメコンデルタでの同病害の初発生は意外に遅く、1990年代前半であり、当時の汚染圃場の割合は最も高い省で数%であった (未発表)。これが2000年になると、この地域の省の最大汚染圃場割合は20%を超え、現在では100%となった省もある (未発表)。グリーンング病の拡大とともに同地域のカンキツ生産は大きく制限されるようになり、被害の酷いカンキツ園では、苗定植後3~4年で収穫できなくなっている (口絵⑦)。このため、本病害に対する防除対策の確立が緊急の課題となっている。

ベトナムでのカンキツ作付面積は、2004年現在約110,000 haであり、メコンデルタでのカンキツ栽培面積は約60,000 ha (56.1%)となっている。この地域の主要なカンキツ生産省は、ベンチェ省 (15,230 ha)、ティエンジャン省 (11,167 ha)、ピンロン省 (7,345 ha)、ハウヤン省 (6,903 ha)、カントー省 (4,982 ha) である。これらの省における全果樹園の面積は84,624 haであり、カンキツ園の面積は45,627 ha (53.9%) である。キングマンダリンは28,736 ha (全カンキツ園の34.0%) で栽培され、その年間生産量は50,100 tと、総カンキツ生産量14,0811 tの35.6%に達し、重要な栽培品種となっている (口絵⑧)。しかし、グリーンング病の侵入とその分布拡大により、キングマンダリンを含めた多くのカンキツの品種で、栽培面積が縮小傾向にある。例えばカントー省では、1995年 (16,526 ha) より2000年 (12,000 ha) までの5年間で、27.4%の減少となった。

国際農林水産業研究センター (以下 JIRCAS) では、「東南アジアにおけるカンキツグリーンング病防除のための基盤技術の開発」というプロジェクト研究を、2004年度から開始した。本プロジェクトは、ベトナムメコンデ

ルタ地帯にあるベトナム南部果樹研究所 (以下 SOFRI, 図-1) と共同で行われ、2006年度より「激発地におけるカンキツグリーンング病管理技術の開発」という新規プロジェクトに引き継がれた。

ここでは、筆者らが旧プロジェクトによりベトナムに派遣されていた2005年のほぼ1年間で得た、ミカンキジラミの新植園へ侵入するための移動距離、ミカンキジラミに対する天敵の有用性、並びに無病苗定植と浸透性薬剤管理によるグリーンング病被害低減法に関する研究結果を紹介する。

I ミカンキジラミの新植園への侵入

現在までに、カンキツグリーンング病防除に成功した例はほとんどない (HALBERT and MANJUNATH, 2004; Mead, 2006)。特に激発地であるベトナムメコンデルタ地帯では、グリーンング病発生果樹園が非常に多く、キジラミが年間通して発生しているため (DIEN, 私信)、キジラミを効果的に防除してグリーンング病を管理することが困難な状況にある (口絵⑦)。多くの農家が、このような感染果樹園において取り木によりカンキツの苗を生産し、それを販売している。したがって、これらの苗木は、定植時に既にグリーンング病に感染している可能性が非常に高く、その後の収穫があまり期待できない。そこで、メコンデルタのような激発地で新たにカンキツ園を作る場合、グリーンング病に感染していない無病苗を定植し



図-1 ベトナム南部果樹研究所 (SOFRI) の本館建物

Citrus Greening Disease and its Management in the Mekong Delta Region of Vietnam. By Katsuya ICHINOSE and Takeshi KANO

(キーワード: カンキツグリーンング病, カンキツ, 浸透性薬剤, 生物防除, ツムギアリ, 防除, ミカンキジラミ, 無病苗, メコンデルタ)